

週報

こひつじ

第40巻 37号
 大津キリスト教会
 菊池郡大津町室 119
 TEL 096-293-4470
 FAX 096-293-4961
 牧師 米村 英二

鳥の巣

その二 未来のことを考えない文明は滅びる

ではどうすべきか。聖書は言う。食欲の抑制であり、明日のことを「その母鳥を子といっしょに取っ 考えない軽率な行動への戒めであてはならない。必ず母鳥を去らせる。

て、子を取らなければならぬ」 今日欲望を満たすことだけを卵を取るのはいい。ひなを取る 考え、明日を計算に入れない生活のもよい。しかし母鳥は去らせな はやがて破綻するだろう。未来のければならない。ことをまったく考慮しようとしな

つまり欲望に任せて何もかも取 い文明が長く続くはずがない。ることはゆるされていけないのであ この原理は、私たちの日常生活る。のすべてに適用される。

なぜか。

その鳥の絶滅を避けるためであ 行なうべきだろう。では、どうやる。逃がしてやった母鳥はまた卵 るか。を産み、ひなを育てることができ 私の場合、ヒルティの次の言葉ではないか。が役立った。

したがって命じられているのは 「あなたは自分の子どもをどんな

人間にするつもりか。それによつて、あとのことは決まってくる。つまり、いわゆる有力者、上流の成功者にしたのか、それとも高貴で善良で誠実な人間に育てたいのか」

家を建てる場合も、やはり未来を考えるべきである。

見た目にきれいな家を建てるのか。長く保つ堅固な家を建てるのか。そこに文明の違いがあるように思われる。

須賀敦子という作家は、学生の頃、教会建築史の授業で宣教師から聞いた次の言葉を忘れることができなかったという。

「こんなちっぽけな、こんな思想のない建物で暮らしていたら、きっと私たちは、これっぽっちの人間になるぞ。建物が人間を造るといことを、よくおぼえておきなさい」

（『心の旅』松山さんの歩幅）

そのとき彼女の心に起こったのは、自分も思想のある建物みたいな人間になりたい、という強い願

いだった。そして、いつかヨーロッパへ行つて、その宣教師が言うような「思想のある建物」を自分

会社と言った。

「礼拝堂はできるだけ広く、でも構造は堅固で、かつメンテナンスが楽であれば、デザインには凝りません。むしろ簡素であればあるほどよいと思っています」

その要望に応えてくれたのか、骨組みは重量鉄骨で造られ、構造だけは見るからにしっかりしたものだ。

三〇年が経って、それが正解だったとわかった。突如やってきたあの熊本地震にもりっぱに耐え、ほぼ完璧な状態で立っている。

神は、子どもを育てるにも、家を建てるにも、明日を考えて、それを行なうことを願っておられる。立ちます。ところが神は、ダビデそこで言われたのだ。鳥の巣を見つけたときは、ひなや卵はとつて食してよいが、母鳥は逃がさなければならぬ。

子孫への配慮のためである。どんな資源も無限ではない。未来のことを考えず、貴重な資源を使いたいだけ使うなら、文明はやがて滅びることになるだろう。(続)

今日の礼拝

○第一礼拝は午前一〇時から、第二礼拝は午前一一時から。

○教会学校は午前一〇時から。○説教は米村牧師。

先週の礼拝

○司会は岩崎宏志さん、奏楽は屋宜浩子さん。

○説教は第二サムエル記七章から。四方の敵を平定したダビデは一国の王となり、立派な杉材の王宮に住んでいます。それなのに神

の箱は今なお天幕にある。それで私は申し訳ないと、神殿建設を思い起こさせてくれるような歌の数々を、現代の、しかも小さな子どもたちがそらんじて歌っています。こうして日本の文化が次の時代に

伝えられてゆくのでしょうか。ミュージカルもすばらしかったです。子どもたちは、教会の会場を借りて毎週地道に練習してきたのです。それを大きな舞台上で演じてくれると、花がいっせいに咲いたように、感動的でした。

先週の出席

礼拝参加者は、第一礼拝が三五名、第二が三四名、合計六九名(男二三、女四六)。それに子どもが名

大津青少年少女合唱団

一五日の礼拝後、大津青少年少女合唱団の定期演奏会が大津町文化ホールで行なわれました。

五〇〇人収容の会場は満席でした。今回は唱歌のメドレーでした。参加者みんなの子ども時代を思い起こさせてくれるような歌の数々を、現代の、しかも小さな子どもたちがそらんじて歌っています。こうして日本の文化が次の時代に

伝えられてゆくのでしょうか。ミュージカルもすばらしかったです。子どもたちは、教会の会場を借りて毎週地道に練習してきたのです。それを大きな舞台上で演じてくれると、花がいっせいに咲いたように、感動的でした。

案内

○洗礼式。一〇月六日(日)礼拝後、嘉島天然プールで。受洗される方は古谷良司さん、徳永めぐみさん、徳永のぞみさん。ほかに希望される方があれば牧師まで。

○『こひつじ』第二七号ができています。今号の「あの人インタビュー」は徳永重則さん、「編集室から」は岩崎宏志さんです。

牧師身辺

一六日は祭日でした。何の日かと思つたら、敬老の日です。「敬老の日とは、お年寄りを敬い、お祝いをする日」とあります。妻にもぼくにも、もう年老いた親たちはいません。考えて見ると、八〇前後のぼくたちが、すでにその対象となつているのかもしれない。でも、ふたりの子どもたちからは、敬老の祝いのメッセージは届きませんでした。まだ老いた両親とは思われていないのでしょうか。喜ぶべきことかと思ひます。